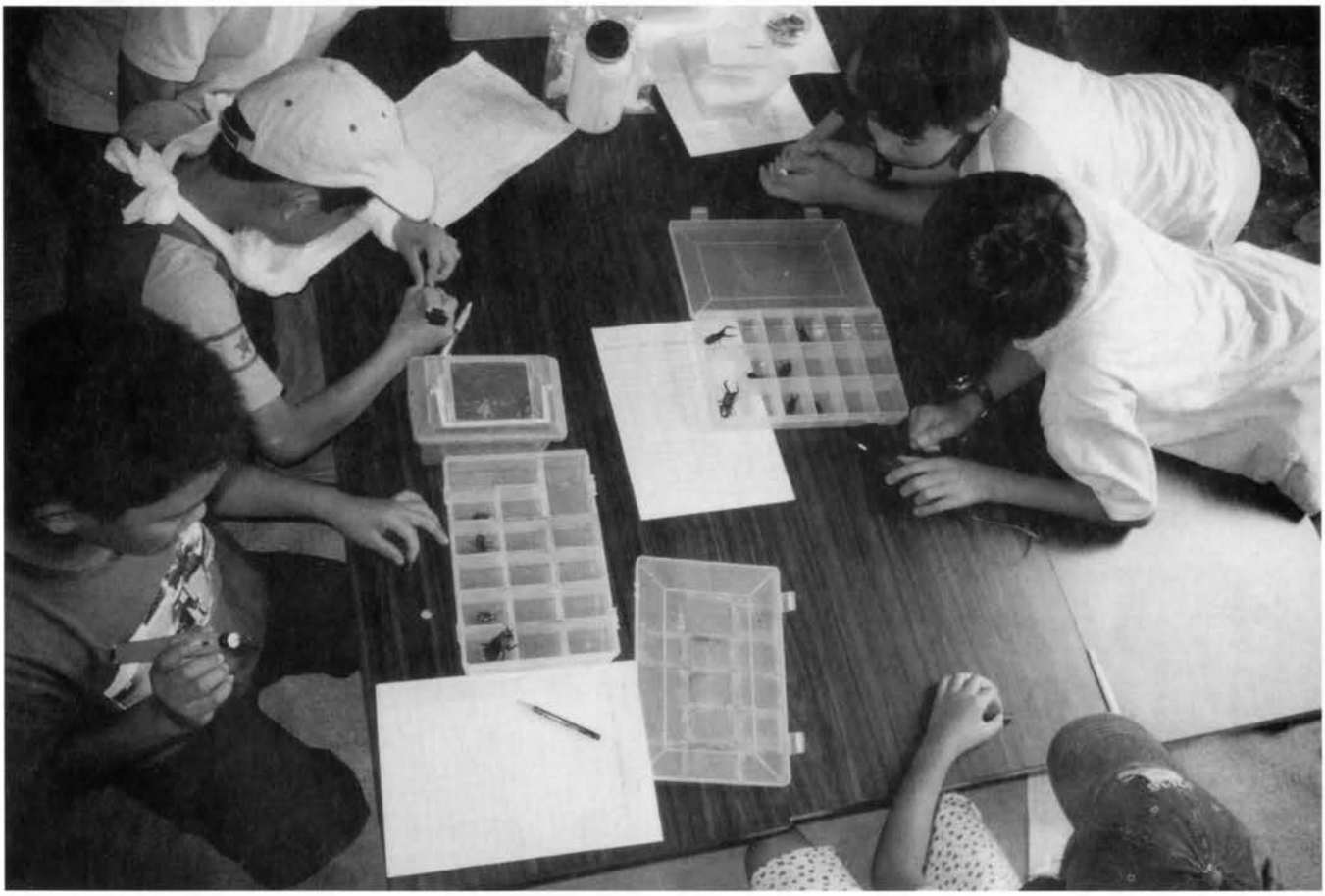
① 毎月25日発行

山と博物館

第50巻 第8号 2005年8月25日 市立大町山岳博物館



マーキング作業をする子ども達　文・写真 清水博文

里山の甲虫調査

この調査では、捕獲したカブトムシやクワガタムシなどの甲虫に文字や数字を書き込んで放し、再び捕獲して行動範囲を調べることにより、自然環境を把握する基礎データを収集できます。子供達に人気があり、身近な里山環境に生息しているカブトムシやクワガタムシなどに実際に触れ、直接調査に携わることを通して、親しみやすい甲虫を指標とした自然環境について考えることのきっかけとなることも期待しています。

この調査は平成十六年七月より「市立大町山岳博物館」と山岳博物館の友の会のサークルとして活動している「こども探検クラブ」の会員が、「長野県環境保全研究所」と共同研究として実施していましたが、平成十七年度からは「市立大町北小学校」も四年三組の総合的な学習やクラブ活動として参加しています。

調査方法は、捕獲したカブトムシやクワガタムシなどの甲虫の背中に針状の電動ヤスリを使い文字や数字を刻み再び野外に放します。マークのついた甲虫を再び捕獲した場合は、種名、場所、文字や数字を確認し記録します。背中に書かれている文字や数字は一個体ごとに定められていますので、個体の移動距離や経過時間などを知ることができます。

この調査では一人でも多くの方々にご協力いただくことにより、再捕獲の機会が増え、調査の精度が上がります。マークのついた甲虫を見つけたり、捕まえた方は、虫のいた場所と虫の種名、背中に書かれている数字やカタカナ、アルファベットなどを確認して山岳博物館までご連絡をお願いいたします（再捕獲では、可能な限り写真か実物をお持ちいただいていますが、捕まえた虫はお返しいたしています）。

（市立大町山岳博物館学芸員）

昭和初期の鹿島槍荒沢奥壁
―小谷部全助、森川真三郎の荒沢奥壁北稜の冬季初登攀をめぐって―（後編）

柳澤昭夫

4、当時のルートをおって

小谷部全助の山日記を手懸りに、当時の積雪期鹿島槍登山のアプローチや登攀ルートを追ってみた。

昭和初期の鹿島槍の登山は残雪の多い、谷やルンゼにルートがとられている。大冷沢側では西沢、中岩沢、布引沢、北俣本谷、同二ノ沢、同三ノ沢であり、荒沢では本谷南俣、そして北俣、同左ルンゼ、同右ルンゼ、そして、白岳沢、カクネ里である。

こうした彼らの足跡をトレースすることで、当時の世界的水準を超えたとも言える積雪期の困難なクライミングを考察してみた。

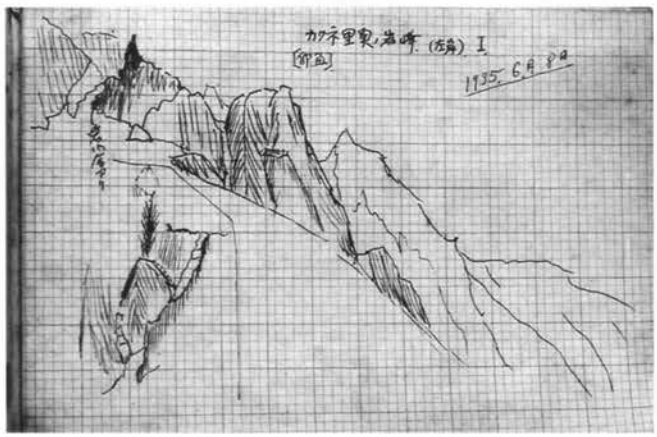
多量の積雪を見る鹿島槍周辺の谷は、谷の両側の斜面から落ちる雪崩で、非常に大量のデブリ（雪崩で運ばれ堆積した雪）で埋まる。積雪の安定する四月、五月は雪崩をさけることは比較的容易であり、多くの谷の初登が六月になされていることを見ても、六月になればブロックの崩壊はあってもほとんど雪崩を心配せずにすむ。急斜面の雪は雪崩れ落ち、谷を埋め、多くの谷は最大でも四〇度で比較的傾斜が緩い。したがってデブリに埋まる谷は登りやすく、登頂ルートに設定しやすかっただろう。

鹿島槍は、まず、西沢をルートにした。赤岩尾根上部にでて、主稜線伝いに登頂している。そして、本谷と周辺の、中岩沢、布引沢などがルートに取られた。西沢同様山頂へは、主稜線を経由する。最も多く取られたのは、本谷である。残雪が繋がる七月頃までは、山頂への最短時間のルートである。

夏になれば滝や岩場も出現し、雪渓は切れるが、例外として北俣本谷三ノ沢をのぞけば、困難な滝や岩場は出現しない。三ノ沢といえども残雪が多く、一箇所出現する滝を除けば、ほとんど七月までは雪で埋められているので登りやすい。しかし、十月の三ノ沢は、いくつもの滝が連続して現れるし、雪渓はズタズタに切れ、不安定なブロックが狭いルンゼに引っかかるように残り、何時崩落するか知れず、危険極まりなかった。本当に彼らはこの谷をアプローチに使ったのか信じがたい。主として、三の沢、二の沢は東尾根へのアプローチとして使われたと共に荒沢奥壁登攀後に下

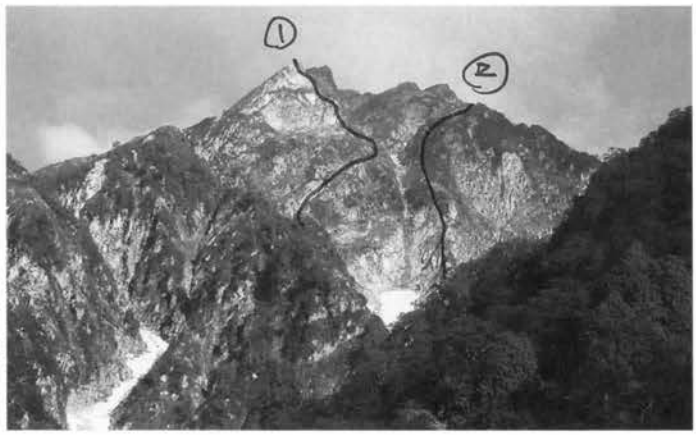
小谷部全助（生田正子氏提供）

小谷部全助の山日記（当館蔵）より①

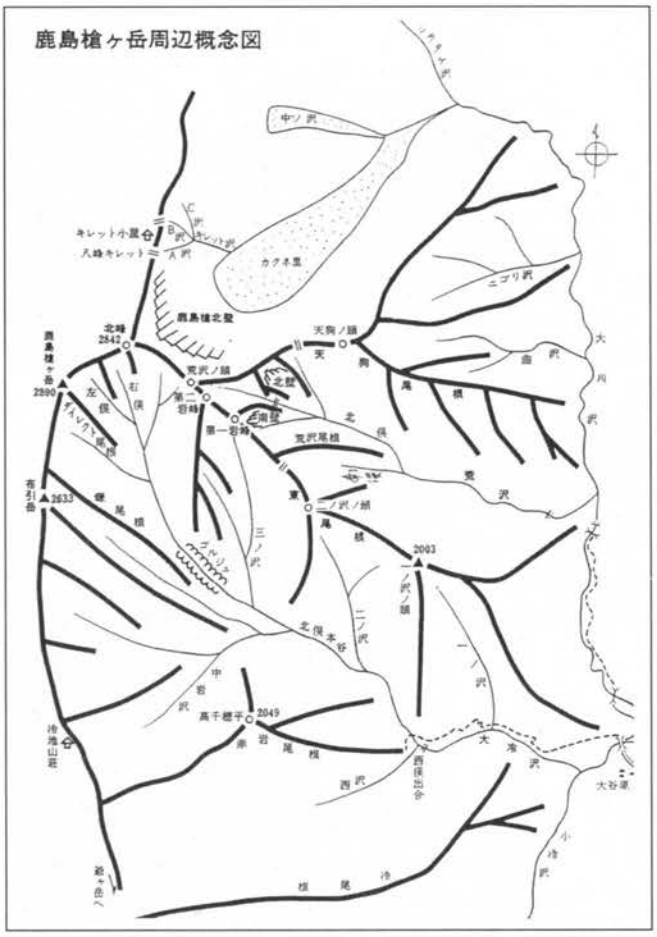


小谷部全助の山日記（当館蔵）より②

小谷部全助らの荒沢奥壁北稜登攀ルート



①荒沢奥壁南稜　②同北稜



鹿島槍ヶ岳周辺概念図　白水社『日本登山大系』より

降路として積雪期も使われている。

鹿島槍東尾根の初登攀は、黒部で名高い冠松次郎である。昭和五年八月、大冷沢北俣本谷の二の沢を詰めて、一の沢の頭と二の沢の頭との間にでて、東尾根から登頂した。下部の樹林帯の藪漕ぎ避けたと言うよりも、沢筋をルートにすることで登頂までのルート全体を把握しやすかったと考えられる。昭和九年の立教大学山岳部の積雪期初登攀は、東尾根末端からである。東尾根の概要が明らかになったからである。なお、甲南、立教などは、積雪期も二の沢を登下降している。東尾根には、第一岩峰、第二岩峰の難所があるが、第一岩峰手前から、又は、第二岩峰で三の沢へ入り、第一、第二岩峰を左から巻いて南尾根のコルへ出ている。また、第二岩峰は右から巻いて本谷ルンゼを登っている。雪崩を見極めなければ取れないルートである。

荒沢最初の大滝は左岸の岩棚をへつっている。荒沢の南俣は両側を岩壁にかこまれた狭い谷であるが八月でも残雪がつながり、荒沢から東尾根へと登下降されている（九月以降は検証していない）。現在、南俣はほとんどトレースされないが、情報が少ないことと冬季は雪崩の危険が大きいことによるのだろう。今では、情報の多い東尾根が冬季は使われている。

荒沢北俣本谷は荒沢尾根の末端をまわり込んだところで八月以降は連続した七つほどの滝が出現し難儀する。浪高パーティーはこの滝を荒沢尾根側をトラバースして南俣に出て下降している。多くの場合は天狗尾根側のハイマツ伝いに高巻きしている。我々もそうした。この滝の上は荒沢奥壁直下のカールボーデン（氷河が削ったお椀のような地形）である。七月頃までは滝もでず全くスムーズに谷を登下降できる。カールボーデンを中心に、左ルンゼから東尾根へ、右ルンゼから天狗尾根へと登下降している。（小谷部山日記・三高生の遭難の頁参照）。この時、小谷部らは、荒沢から入山し、上の大滝は、天狗尾根側を高巻きし、カールボーデンに出ている。そして、右ルンゼから天狗尾根を登り、山頂から冷池方面に向かう途中、山頂付近で遭難者を発見している。

マガリ沢ニゴリ沢の記録はない。

カクネ里へは遠見尾根から入りやすく浪高や早大パーティーら多くのパーティーが北壁へのアプローチにしている。小谷部らもカクネ里から天狗尾根に登り荒沢へ下降し奥壁北稜を初登攀した。カクネ里へは大川沢をアプローチにすることも困難ではない。ことに残雪期、四月頃までは荒沢出合からカクネ里まで谷は雪で埋まっている。

カクネ里から後立山主稜線へは口ノ沢、中

西沢と爺ヶ岳　5月

三ノ沢の秋

三ノ沢の屈曲点の滝

三ノ沢　6月

鹿島槍ヶ岳本谷　8月

鹿島槍ヶ岳本谷　4月

ノ沢、キレット沢（奥の雪渓はまだ検証していない）、夏でも（八月末でも）残雪の谷をルートにすることができた。当時も今も情報の少ない、未知な領域と言えるが残雪の谷はルートを設定しやすかったと言える。

しかし、未知であるが故の困難をともなうだけに、アプローチにおいて実践的にロープの技術やルートを設定する能力を鍛え、高めていくことができたと考えられる。彼らはゲレンデで技術訓練するよりも、実際の山で、そのアプローチで山の概念を把握し、技術的訓練を行い、クライミングルートを設定する力を培ったと思う。

鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁　7月

鹿島槍ヶ岳荒沢　6月

現代の我々は多量の情報をもとにし、東尾根や天狗尾根に安全なアプローチを設定できる。しかも、それが当然のように。そしてその情報の範囲から未知の領域へと一歩も範囲を越えられない。なぜなら情報が自分で経験し集積した情報でないからである。

昭和初期、小谷部らクライマーにとって全ての谷や尾根、岩壁が未知の領域で冒険的であった。だからこそ彼らは、アプローチで、技術を訓練し、状況を判断する力を養い、自分で経験を集積していった。その延長上に荒沢奥壁や北壁の登攀が存在した。

最も驚くことは冬季も雪崩が収斂（しゅうれん）するこの谷をアプローチにしたことである。どこかで雪崩の危険に対する判断力、雪崩を回避する知恵を身につけたのだろう。

我々は東尾根、天狗尾根から谷底へ下降し奥壁や北壁へ取り付いた、荒沢やカクネ里こそアプローチにはしないが谷底へ入るという意味では雪崩に関する同じリスクを背負っている。

雪崩に関する多くの科学的知見を手に入れた現在でも、雪崩が出るかも知れないという予測は高めることはできたが、依然として雪崩は出ないという確信は得られないまま谷底へ下降し岩壁に取り付いている。科学的な予測というよりも雪崩の観察、多くの冬山経験の集積による「勘」で状況を判断している。全く彼らと同様である。彼らは恐れを知らない、恐いもの知らずの無鉄砲なクライマーではない。むしろ知的で文献を読み、一歩一歩経験を積み重ねた、極めて慎重なクライマーであった。未知の本谷、荒沢、カクネ里をアプローチにして、鹿島槍周辺のこの谷を登り降りする過程で、力を高めていったのだろう。

登山における困難な課題を解決してきたのは基本的には安全性を高める防御の力であろう。それは技術的には確保技術の展開であり、状況を判断する力や荒天の中で生き抜く生活の知恵であり、雪崩を回避する知恵である。実践的に経験を集積し山を捉え、ルートを設定し、山登りを構成する力を高めてきたからである。

現代の登山にみられるように情報を集積し、知識を習得し、訓練で技術を身につけても経験という検証を経ない情報、知識や技術は、知恵として生きてはこないだろうし、山登りを構成する力にはならないのではないだろうか。

（市立大町山岳博物館館長）

緊急臨時休館のお知らせ

当館の建物を調査したところ、展示室天井の一部にアスベスト吹き付けが露出している疑いがあることがわかりました。処理が終了するまで八月十日から当面の間、緊急対応として臨時休館いたします。ご迷惑をおかけいたします。なお、付属園は平常通りご覧いただけます。

山と博物館　第50巻　第8号
二〇〇五年八月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二二―二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三二九三

R100　PRINTED WITH SOY INK　この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。